

東洋の思想と宗教 第40号 令和5年(2023)3月 抜刷

日本古寫經『金剛場陀羅尼經』(國寶本・五月一日經本・  
七寺一切經本・興聖寺一切經本)について

落合俊典

## 日本古寫經『金剛場陀羅尼經』（國寶本・五月一日經本・七寺一切經本・興聖寺一切經本）について

落 合 俊 典

### 0) まえがき

漢語佛教文獻に關して、特に刊本大藏經（一切經）には系譜論的な潮流があることに留意しなければならないことは既に周知のこととなってきたと思われる。一方、二十世紀初頭の敦煌文獻出現とともにそれらと親近性を有する日本古寫經にも注意する必要がある<sup>1</sup>。つまり『大正新脩大藏經』などの活字資料やそのテキストデータ（SAT, CBETA）にだけ依據するのは今日的な研究手法ではないと考えられる。池麗梅<sup>2</sup>・佐久間秀範<sup>3</sup>・室屋安孝<sup>4</sup>・藤原智<sup>5</sup>・林寺正俊<sup>6</sup>・深見慧隆<sup>7</sup>など日本古寫經を用いて斬新的研究が拓かれている。もちろん活字資料だけでも十分な研究が可能な文獻も多々あるが、やや趣向の異なっ

1 竺沙雅章「漢譯大藏經の歴史：寫經から刊經へ」（大谷大學大藏會講演會 1993.3）。後『宋元佛教文化史研究』（汲古書院、2000.8）に収録。

2 池麗梅「興聖寺一切經本『續高僧傳』一刊本大藏經と日本古寫經本の交差」（『日本古寫經善本叢刊』第八輯「續高僧傳卷四・卷八」。國際佛教學大學院大學日本古寫經研究所。2014年）。同「『續高僧傳』卷頭目錄諸本對照」（『日本古寫經善本叢刊』第九輯「高僧傳卷五 續高僧傳卷二十八・卷二十九・卷三十」。國際佛教學大學院大學日本古寫經研究所。2015年）。

3 佐久間秀範「『サーンキヤ・カーリカー』を根據とする意識→成所作智、五識→妙觀察智の正當性」（『哲學・思想論集』第33號。平成20年3月25日）。同「〈智〉と〈識〉—兩者の結合關係とその成立過程—」（『豐山學報』第28・29合併號。昭和59年）。

4 室屋安孝「漢譯『方便心論』の金剛寺本と興聖寺本をめぐって（附追記）」（『日本古寫經研究所研究紀要』1號。pp13-34.2016.3）。

5 藤原智「日本古寫經『辯正論』と親鸞『教行信證』」（『日本古寫經研究所研究紀要』2號。pp53-81.2017.3）。

6 林寺正俊「本文テキストからみた法道寺所藏の天平寫經『雜阿含經』の特色」（『日本古寫經善本叢刊』第10輯『法道寺藏天平寫經雜阿含經卷第三十六／岩屋寺藏思溪版高僧傳卷第一』93頁～102頁。國際佛教學大學院大學日本古寫經研究所。令和元年）。

7 深見慧隆「親鸞自筆本における『涅槃經』の受容形態—刊本大藏經と日本古寫經との比較検討を通して—」（龍谷教學會議第56大會發表。令和4年6月7日）。

た經典論書を取り上げる際には視野を広げて検証していくことが肝要となってくる。

さて、『金剛場陀羅尼經』なる經典は從來の佛教學研究史上では殆ど取り上げられてこなかった漢譯資料である。『大正藏』には麗本（高麗再雕版）を底本として宋版（南宋思溪藏）・元版（普寧寺版）・明版（嘉興藏）などの刊本大藏經が對校本として用いられている。加えて聖語藏本までも對校している校訂の行き届いたテキストである。その中に

時に觀自在菩薩、九萬二千菩薩と共に虛空中より妙色聚樂莊嚴窟に向かえり。佛所に來り到るも地に下りること能わず。諸菩薩と共に虛空中に加跣して住せり。

（大正藏原文：時觀自在菩薩。共九萬二千菩薩。從虛空中向妙色聚樂莊嚴窟。來到佛所不能下地。共諸菩薩於虛空中加跣而住。）

とある經文の中の「觀自在菩薩」に脚注が付されていて宋元明の三本は「觀世音菩薩」になっていると記している。

ここで想起するのは「觀世音」は羅什譯（舊譯）であり、「觀自在」は玄奘譯（新譯）であるという通例として認知されている事柄である。刊本の種類によって異なるのは何故かとなるが、そもそも『金剛場陀羅尼經』は隋代の闍那崛多譯である。玄奘譯語が混じるはずはない。そうなると大正藏の底本に用いられた高麗再雕版にどうして玄奘譯語が闖入したのだろうか。それとも玄奘以前にすでに「觀自在」と漢譯されていて使用されたのだろうか。これだけでも迷路に入ったような気分になるが、敦煌本や日本古寫經本はどうなっているだろうか。見てみたいと思うのが自然であろう。

從來は敦煌本を見るのは困難であったが、『敦煌寶藏』影印から始まり最近にはIDP（International Dunhuang Project）などで鮮明なカラー畫像が見える資料もあり、また法藏・英藏・俄藏・中國國家圖書館藏・杏雨書屋藏敦煌祕笈等の大冊の影印本まで刊行されているので當該經典が存在するのであればアクセスが簡単である。が、しかし敦煌本に漢譯『金剛場陀羅尼經』は存在していない。

また日本古寫經本も接近するのは容易でなかったが、丸善雄松堂からカラー

日本古寫經『金剛場陀羅尼經』（國寶本・五月一日經本・七寺一切經本・興聖寺一切經本）について（落合）DVDの影印が刊行され、さらに近年は平安鎌倉寫經を中心とした日本古寫經データベース（國際佛教學大學院大學日本古寫經研究所）の運用が軌道に乗り始めて相當な經卷が閲覽できるようになってきた。もっともネットで經卷の全てが閲覽できるシステムにはなっていない。卷首の一画面が見られるだけである。これは所藏寺院の貴重な畫像が不用意にハッキングされて商用に轉賣されるのを懼れるからである。重要な知的財産保持の方策であるが、東京在住でない國內外の研究者にとっては不便であり、上京もしくは來日して東京都文京區春日2丁目にある國際佛教學大學院大學の圖書館に來なければ全卷の閲覽ができないのである。日本古寫經データベースには令和4年3月の時点で金剛寺一切經約4,600卷・興聖寺一切經約3,000卷・七寺一切經約3,000卷がデータ化されている。

一年間でアップできる經卷數は400卷前後であるとするならば、三ヶ寺一切經畫像のすべてが揃うにはまだ10年を要する。平安鎌倉寫經はこの他にも中尊寺一切經・美福門經・妙蓮寺藏松尾社一切經・西方寺一切經（大門寺一切經）・名取新宮一切經・石山寺一切經・高山寺藏經など數萬卷に及んでいる。

これらの中、『金剛場陀羅尼經』が現存し、データ化されているのは七寺一切經と興聖寺一切經の二本だけである。奈良寫經では五月一日經、すなわち『大正藏』の對校本として使用されている正倉院聖語藏本である。今日これは丸善雄松堂の影印DVDによって閲覽可能である。

さて、前述の「觀世音菩薩」と「觀自在菩薩」の異讀を日本古寫經で見ると、五月一日經（天平寫經。8世紀）・興聖寺一切經（平安寫經。12世紀）・七寺一切經（平安寫經。12世紀）の三點は全て「觀世音菩薩」となっている。思溪藏と福州版も「觀世音菩薩」である。「觀自在菩薩」と記されている本文を有するのは高麗再雕版と趙城金藏だけになる。これら二藏の底本は開寶藏（北宋敕版・蜀版）であるから、大陸で、ある時期に改訂されたと考えるのが妥當ということになるうか。

このようにさほど知られていない經典を取り上げても一切經の大きな系譜が垣間見えるのであるが、今回は國寶本の『金剛場陀羅尼經』に焦點を當てて考察を加えたい。

## 1) 國寶本『金剛場陀羅尼經』に関する近年の研究動向

日本古寫經の中で書寫年代が記された最古の寫經と言えは國寶本『金剛場陀羅尼經』（舊小川家藏、現文化廳藏。）がよく知られているが、近年その書寫年代に關して問題提起がなされた。本書の奥書には年號がないが干支が丙戌（ひのえいぬ）と記されており、そこから686年とされている。ところが裏打ちされた紙背を透かしてみると「天平十八年」（746）の墨書が見えると藤本孝一氏が指摘された<sup>8</sup>。この墨書と関係があるのか後補軸紙には「右丙戌天平十八年波羅門僧正入國之歲」と記されているという。「ひのえいぬ」（丙戌）の歲次は西曆686年もしくは天平十八年746年である。さらに六十年を下って806年以降になることは、到底考えられないことであろうから686年か746年のどちらかの書寫に相違ない。しかし、もし書寫年代が後者の年次に繰り下げられれば日本最古の記年のある稀觀本としての地位が揺らぎかねないことになる。

藤本孝一氏が平成28年11月12日に國際佛教學大學院大學の公開研究會で發表された際に石塚晴通氏と赤尾榮慶氏が質問され種々活發な討論がなされた。その後、今年に至って赤尾榮慶氏が「國寶『金剛場陀羅尼經』について—藤本論考を承けて—」と題して『日本古寫經研究所研究紀要』7號（2022年3月刊行）に投稿している。

赤尾榮慶氏の主張を整理すると「天平十八年」の墨書は明らかに後代の書寫文字であり、近世か近代の或る人物が「丙戌年」を「天平十八年」と想定して墨書されたのであろうと述べている。藤本孝一氏は、しかし寫本の紙背の中には明確に「天平十八年」と書かれているのであり、これを軽々に近世近代の書き込みと捉えてよいのかと疑問を投げかけているように思われる。

以上のような研究は對象物が國寶指定寫本であるだけに世間の耳目を集める問題提起とならざるを得ない。筆者も些か關心を抱く一人であるが、國寶本の熟覽調査が實施されていない段階で専門家の両者の見解を批評することはとても無謀に思えてならない。

8 藤本孝一「國寶『金剛場陀羅尼經』と評について」（『日本古寫經研究所研究紀要』3號、2018年）。

日本古寫經『金剛場陀羅尼經』（國寶本・五月一日經本・七寺一切經本・興聖寺一切經本）について（落合）

しかしながら、幸いにも最近國寶本の影印本<sup>9</sup>（武田墨彩堂刊行本）を入手することができたので文獻學的方面からのコメントを付すことは許される範囲であると考えるに至った。さらに藤本孝一氏から研究メモ用の畫像閲覧が許可されたので書寫時期に關して發表を行うことにした次第である。

## 2) 『金剛場陀羅尼經』日本古寫經の諸本

『金剛場陀羅尼經』の主な古寫經を取り上げてみたい。併せて參考のために刊本についても略記しておく。

### ① 國寶本『金剛場陀羅尼經』〈白鳳期〉（文化廳所管）

藤本孝一氏に依れば本經の法量等は以下の如し。

一卷。①法量は縦二六・一センチメートル全長七一・〇センチメートル、紙數十九紙からなる卷子装である。②表紙は金茶地後補表紙で、軸首は後補撥型軸である。外題は金沙子散題簽貼付で墨書名はない。③料紙は黄藥染殺紙打紙で、界高一九・八センチメートル、界幅一・七センチメートルである。④本文は一紙二十七行、一行一七字、首題「金剛場陀羅尼經卷」、尾題「金剛場陀羅尼經卷一」とある。⑤印記等は、首尾及び紙繼目裏に墨方陽刻印「法隆寺／一切經」（縦四・七センチメートル、横四・七センチメートル）が六顆捺されている。⑥後補軸紙に、「右丙戌天平十八年波羅門僧正入國之歲」と識語がある。⑦收納箱は、桐印籠箱（縦三三・〇センチメートル、横八・〇センチメートル、高七・五センチメートル）で、隸書體で「金剛場陀羅尼經」と墨書する。⑧傳來は法隆寺舊藏で、市島春城（一八六〇～一九四四）氏から小川家に傳來し、平成十六年度に文化廳が購入した<sup>10</sup>。また奥書は、「歲次丙戌年五月川内國志貴評内知識爲七世父母及一切衆生敬造金剛場陀羅尼經一部藉此書因往生淨土終成正覺教化僧寶林」<sup>11</sup>。

武田墨彩堂の影印本を見ていくと後半に八十數行の脱落があるようである。これを『大正藏』本で示してみると以下の箇所になる。

9 『金剛場陀羅尼經』（影印解説）編集發行武田基一。武田墨彩堂。解説・野本白雲。昭和13年刊。

10 京都の小川家舊藏。2005年に小川雅人氏より5億4千萬円で文化廳が購入した（政府調達札データ／文部科學省／2005年2月16日）ものである。

11 藤本孝一氏前掲書。

「菩薩得是智法門已」(T.21.p857b12)～「取相入陀羅尼法門」(T.21.p858b8)

そこで藤本孝一氏に許可を求めて研究メモとしてデジタル撮影した畫像を閲してみると八十數行分は存在していることが明らかになった。影印本の錯簡ということになる。藤本孝一氏のデジタル畫像にはメジャーが置いていないが、紙數は十五紙とわかる。何故ならば一紙ごとに地界下に漢數字で墨書されているからである。紙継ぎは比較的良好に見える。整理すると以下のようになる。

第1紙25行。第2紙27行。第3紙27行。第4紙27行。第5紙22行。第6紙26行。

第7紙23行。第8紙25行。第9紙24行。第10紙27行。第11紙27行。第12紙27行。

第13紙27行。第14紙26行。第15紙(本文)10行。

まとめると

10行(1箇所)…第15紙(卷末の紙であるから行數は大概少ないのが一般的である。)

22行(1箇所)…第5紙。

23行(1箇所)…第7紙。

24行(1箇所)…第9紙。

25行(2箇所)…第1紙・第8紙。

26行(2箇所)…第6紙・第14紙

27行(7箇所)…第2紙・第3紙・第4紙・第10紙・第11紙・第12紙・第13紙。

行數の總數は370行であるが、紙はみな長さが同一ではない。27行に整然と書寫されている譯でないことがわかる。官立の寫經所に提供される寫經紙は概ね規格に沿ってほぼ一様であるが、そうでない知識經などは不統一なことが多い。その點からも國寶本は教化僧寶林なる僧侶の個人的な寫經とする位置づけになる。

總字數であるが、 $370 \text{ 行} \times 17 \text{ 字} = 6,290 \text{ 字}$ と推測される。ただ、これは嚴密な總字數ではない。

日本古寫經『金剛場陀羅尼經』（國寶本・五月一日經本・七寺一切經本・興聖寺一切經本）について（落合）

② 天平寫經（五月一日經）本『金剛場陀羅尼經』（正倉院聖語藏<sup>12</sup>）〈奈良時代〉

1行17字。その他の法量は未詳であるが、畫像から推測値を出してみる。なお、書誌情報は杉本一樹元正倉院事務所長が作成中である。それらの五月一日經と神護景雲經は「奈良寫經データベース<sup>13</sup>」（假稱）に収録される予定である。

熟覽調査し法量を記さないといけないのであるが、ここでは假に畫像から大凡の法量を畫像經卷の下部に張り付けられたメジャーに依據示して諸本比較の一助としたい。

外題「金剛場陀羅尼經」（後補寫）。内題「金剛場陀羅尼經」。尾題「金剛場陀羅尼經卷」。

譯者號「三藏法師闍那崛多譯 備」。

全14紙。一行17字。

第1紙（縦26.5糎。横44.0糎前後。23行。空格1行。内題1行）

第2紙（縦26.5糎。横46.5糎前後。26行）

第3紙（縦26.5糎。横44.5糎前後。25行）

第4紙（縦26.5糎。横45.2糎前後。26行）

第5紙（縦26.5糎。横41.2糎前後。23行）

第6紙（縦26.5糎。横46.5糎前後。25行）

第7紙（縦26.5糎。横46.2糎前後。25行）

第8紙（縦26.5糎。横46.5糎前後。25行）

第9紙（縦26.5糎。横46.3糎前後。25行）

第10紙（縦26.5糎。横42.0糎前後。23行）

第11紙（縦26.5糎。横46.1糎前後。25行）

第12紙（縦26.5糎。横42.5糎前後。23行）

第13紙（縦26.5糎。横46.2糎前後。25行）

第14紙（縦26.5糎前後。横46.0糎前後。25行）。

12 丸善雄松堂刊。正倉院聖語藏DVDに依る。

13 科研費「〔奈良朝敕定一切經〕の総合的研究—漢文佛教テキストの資料的基盤の再構築に向けて—」（2020-2024 科研費基盤A研究代表者：落合俊典）

第15紙（縦26.5糎。横46.0糎前後。25行）。

第16紙 願文（縦26.5糎。横31.0糎。16行〈内空格2行〉）

行數の總數は369行である。各紙横の長さは必ずしも統一していないがほぼ23行から26行となっている。

③ 七寺一切經本『金剛場陀羅尼經』（七寺藏<sup>14</sup>）

卷子本。表紙存。假6函。奥書「一校了」。院政期。

外題「金剛場陀羅尼經」。内題「金剛場陀羅尼經」。尾題「金剛場陀羅尼經一卷」。譯者號「三藏法師闍那崛多譯」。1紙28行。1行17字。紙數14紙。

第1紙（縦26.6糎。横51.2糎。25行）。

第2紙（縦26.6糎。横53.0糎。28行）

第3紙（縦26.6糎。横53.4糎。28行）。

第4紙（縦26.6糎。横53.2糎。28行）

第5紙（縦26.6糎。横52.8糎。28行）。

第6紙（縦26.6糎。横52.8糎。28行）

第7紙（縦26.6糎。横53.0糎。28行）。

第8紙（縦26.6糎。横53.0糎。28行）

第9紙（縦26.6糎。横52.8糎。28行）。

第10紙（縦26.6糎。横52.6糎。28行）

第11紙（縦26.6糎。横52.8糎。28行）。

第12紙（縦26.6糎。横53.4糎。28行）

第13紙（縦26.6糎。横53.2糎。28行）。

第14紙（縦26.6糎。横42.3糎。9行）

寫經紙に限って言えば七寺一切經本の横の長さは均一で恰も奈良寫經のようである。行數の總數は370行である。

14 『尾張史料七寺一切經目録』45頁。昭和43年。七寺一切經は院政期の承安五年（1175）年から治承四年（1180）の尾張地方における寫經事業であった。大中臣安長が願主となり、榮藝が勸進僧となり榮俊が大法師となって一切經が書寫されたが、一切經の範例を法勝寺や梵釋寺藏經に求めたことから特異な構成となった。それは『貞元録』の「入藏録」に付されていた「不入藏目録」の經典を書寫したことである。不必要と經録が指摘しているにもかかわらず法勝寺や梵釋寺等權威ある寺院の經藏構成に倣ったのである。そのため、『毘羅三昧經』『清淨法行經』『淨度三昧經』などの古逸經典が現存する至る。

日本古寫經『金剛場陀羅尼經』（國寶本・五月一日經本・七寺一切經本・興聖寺一切經本）について（落合）

④ 興聖寺一切經本『金剛場陀羅尼經』（興聖寺藏<sup>15</sup>）〈院政期〉

折帖。179箱。院政期。外題「金剛場陀羅尼經」。内題「金剛場陀羅尼經」。尾題「金剛場陀羅尼經一卷」。譯者號「三藏法師闍那崛多譯」。1紙17行。紙數13紙。

第1紙（縦25.1糎。横52.0糎。28行）。

第2紙（縦25.1糎。横55.0糎。30行）

第3紙（縦25.1糎。横54.0糎。31行）。

第4紙（縦25.1糎。横54.0糎。29行）

第5紙（縦25.1糎。横55.5糎。30行）。

第6紙（縦25.1糎。横52.3糎。28行）

第7紙（縦25.1糎。横52.8糎。29行）。

第8紙（縦25.1糎。横52.0糎。28行）

第9紙（縦25.1糎。横52.2糎。28行）。

第10紙（縦25.1糎。横49.5糎。27行）

第11紙（縦25.1糎。横52.7糎。28行）。

第12紙（縦25.1糎。横54.3糎。29行）

第13紙（縦25.1糎。横48.6糎。23行+空格4行。）。

興聖寺一切經本は、七寺一切經本より若干紙の長さが不安定であるが、ほぼ同じ規格の經典用紙を用いたことが推測される。行數の總數は368行である。國寶本と七寺本の370行に近似する。

⑤ 石山寺一切經本『金剛場陀羅尼經』（石山寺藏<sup>16</sup>）〈院政期〉、未調査。

\* 第29-21 金剛場陀羅尼經 一帖

院政期寫、楮交り斐紙、訓點ナシ、一紙長49.1糎、界高20.2糎、界幅

15 『興聖寺一切經調査報告書』京都府教育委員會。平成10年。この報告書に依れば興聖寺一切經は京都龜岡に在した院政期の西樂寺一切經を主としてその後、解脱房貞慶の海住山寺で寫經事業がすすめられ、さらに貞慶没後の十三回忌には奈良の僧侶が補寫し缺卷が無いように終始努力がなされたという。今日にあっても現住の望月宏濟師は傳統に則り缺卷を鋭意補寫する事業に取り組んでいる。また經藏と經典箱の修復にはクラウドファンディングによる資金集めでほぼ賄ったという。缺卷の寫經もクラウドファンディングによって有志の方の参加による書寫事業を計畫してはどうだろうかと思う。

16 石山寺文化財綜合調査團編『石山寺の研究一切經篇』250頁。法藏館。昭和53年。

1.8 糶、

(奥書) 一交了

⑥ 松尾社一切經本『金剛場陀羅尼經』(妙蓮寺藏<sup>17</sup>)〈院政期〉、未調査。

\* 1510 (外題) 金剛場陀羅尼經。(表紙) 原。(八雙) 有。(紐) 有。

(軸首) 塗・朱頂。(首題) 金剛場陀羅尼經。(印・花押) 無。(奥書) 無。(時代) 平安後期。

(備考) 「無際經等八經十二一一八十」「定十三枚」。

なお刊本では① 趙城金藏本『金剛場陀羅尼經』。② 高麗再雕本『金剛場陀羅尼經』。南宋思溪藏本『金剛場陀羅尼經』。③ 福州版『金剛場陀羅尼經』等がある。

これらが主な古寫經と刊本である。ちなみに敦煌本には現存しない。また刊本のみでは開寶藏や高麗初雕版になく、房山石經にもないが、元版・明版等には存在する。これらは南宋思溪藏の系統にあるので敢えて取り上げる理由がないであろう。本稿において刊本は考證の対象としていないが、本經の校訂本がなされる場合には當然古寫經と刊本を含めた諸本を集成していかなければならない。

また隋の闍那崛多が開皇七年(587)に譯した『金剛場陀羅尼經』には、異譯として元魏の佛陀扇多譯『金剛上味陀羅尼經』一卷(正光六年於洛陽出。525年)があり、さらに異譯に曇倩譯『金剛壇廣大清淨陀羅尼經』(753年頃)がある。この寫本(P.3918等)は敦煌本に限定されている。研究と翻刻は上山大峻氏の『増補敦煌佛教の研究』(法藏館。2012年)に収録されている。

さらにチベット譯<sup>18</sup>がカンギュウルに入っているが今回はこれらの原典考證に資する資料は些か主題と異なるので取り上げ無かった。

17 中尾堯編集『京都妙蓮寺藏『松尾社一切經』調査報告書』467頁。大塚工藝社。平成9年。

18 『大谷大學圖書館藏西藏大藏經甘殊爾勘同目錄』。pp304-305. 1930-1932.

No.807 (Da7) Ā -Vajramaṇḍa-nāma-dhāraṇī-m.s. "Rdo-rjeḥi Snyin-po'ḥi gZungs" 聖金剛藏陀羅尼大藏經。印度新教師 Śilendrabodhi, 大校修譯官尊者 Ye-shes-sde 譯、閱、刊定。  
[漢] 金剛上味陀羅尼經 佛陀扇多譯 (Nanjio373; 大正 1344). 金剛場陀羅尼經 闍那崛多譯 (Nanjio372; 大正 1345)

日本古寫經『金剛場陀羅尼經』（國寶本・五月一日經本・七寺一切經本・興聖寺一切經本）について（落合）

### 3) 刊本大藏經四本と日本古寫經四本の比較

ここで日本古寫經四本の比較を行うが簡略に示すと以下のようになる。まず大正藏本で校異の場所を示し、刊本大藏經の高麗再雕版・趙城金藏・思溪藏・福州版の四本を並べ、次いで日本古寫經の國寶本・天平本（五月一日經）・興聖寺本・七寺本の四本を列挙する。

『金剛場陀羅尼經』諸本（8本）の主要箇所比較

刊 本 大 藏 經				日 本 古 寫 經				
大正藏 T20.pp854 ～858	高麗再雕版 影印本	趙城金藏 影印本	思溪藏 中國國家圖書館	福州版 宮内廳書陵部	國寶本 686年 文化廳所管	天平本 740年 正倉院聖語藏	興聖寺本 12世紀	七寺本 12世紀
① p.854b15	金剛場陀羅 尼經 知169	金剛場陀羅 尼經 知169	金剛場陀羅 尼經 四 過170	金剛場陀羅 尼經 四 過170	金剛場陀羅 尼經	金剛場陀羅 尼經	金剛場陀羅 尼經	金剛場陀羅 尼經
② p.854b16	隋三藏法師 闍那崛多譯	隋三藏法師 闍那崛多譯	隋天竺三藏 法師闍那崛 多譯	隋天竺三藏 法師闍那崛 多譯	三藏法師闍 那崛多譯 備	三藏法師闍 那崛多譯 備	三藏法師闍 那崛多譯	三藏法師闍 那崛多譯
③ p.854b20	加趺	加趺	加趺	加趺	跏趺	跏趺	跏趺	跏趺
④ p.854b21	相	相	相	相入	相入	相入	相入	相入
⑤ p.854c12	觀自在	觀自在	觀世音	觀世音	觀世音	觀世音	觀世音	觀世音
⑥ p.854c18	優	優	優	優	憂	憂	憂	憂
⑦ p.855a18	迨	怠	怠	怠	怠	怠	怠	怠
⑧ p.855c19	煩	煩	瞋	瞋	煩	煩 瞋(朱字)	瞋	瞋
⑨ p.855c19	癡煩惱	癡煩惱	癡惱	癡惱	癡煩惱	癡煩惱	癡惱	癡惱
⑩ p.857c10	耳不作念	耳不作念	耳不念	耳不念	耳不念	耳不念	耳不念	耳不念
⑪ p.858a6	如	如	如	相	相	相	相	相
⑫ p.858c15	×	×	×	×	卷一	卷	一卷	一卷

上から順次考察してみよう。①は經題であるが、經題下に思溪藏と福州版は「四」とあるのは千字文「過」帙に入っている十點の經典のなかの第四番目という意味である。また高麗再雕版・趙城金藏では千字文が「知」とあるが、思溪藏と福州版は「過」となっているが、これは途中で順次が繰り下がったからである。②は譯者號が三種ある。隋三藏法師闍那崛多譯と隋天竺三藏闍那崛譯と三藏法師闍那崛多譯である。日本古寫經本はどれも同じである。

ここで注目されるのは「備」である。後述するが、通常は千字文の文字になる。しかし時代的に686年であれ天平十八年の746年であれ一切經に千字文が付される時期ではない。智昇撰とされる『開元釋教錄略出』には千字文が付されているが、本書は智昇の撰述でないことは方廣錡氏<sup>19</sup>が指摘したところであり、實際に一切經に千字文が付されるのは必ずしも明確でないがやや後代を下らないと現れない。③は結跏趺坐のことであるが、刊本大藏經系は足偏の付されない「加」になっている。④は刊本大藏經の福州版だけが日本古寫經本と相應する。福州版には時折このような事例が散見する。⑤は前述したように開寶藏系の高麗再雕版と趙城金藏が「觀自在」となっている。⑥は優曇鉢華 Skt. udumbara の音寫として「優」にするか「憂」にするかであり、嚴密な中國語學史で論議されなければならないが、『大正藏』の脚注では兩音が混在しており、俄かに判斷できない。⑦は高麗再雕版だけが「迨」とある。本來であれば開寶藏系の趙城金藏も同字體にならなければならないが、高麗再雕版を校正した守其（生没年不詳）の獨自考證か。⑧および⑨は文章が錯誤しているのか意味内容が明確でない。これはチベット語譯と異譯經典『金剛上味陀羅尼經』等と原典考證の必要性がある。恐らく「癡惱」がチベット語譯に近い。そうすると思溪藏と福州版および七寺本と興聖寺本が原意に近接しているか。⑩は「耳は念を作さず」とも「耳は念はず」とも同内容であり、「作」の有無は關係ないが、系統を見る上で参照するという箇所であろう。⑪は刊本大藏經の福州版だけが日本古寫經本と同じというケースである。前後の文章は『高麗再雕版』等では「世尊。我見諸受性。如幻化本來不生」であるが、福州版と日本古寫經

19 『八～十世紀佛教大藏經史』中國社會科學出版社、1991年3月。『中國寫本大藏經研究』、上海古籍出版社、2006年12月（第二次增訂本）。

日本古寫經『金剛場陀羅尼經』（國寶本・五月一日經本・七寺一切經本・興聖寺一切經本）について（落合）本は「世尊。我見諸受性相。幻化本來不生」となっている。前者の方は「幻化の如く本來不生なり」と読みやすい。後者は「我、諸の受性相を見るに、幻化は本來不生なり」との意味内容か。やや理解し難い。⑫卷末の尾題は重要な指標となる。以下簡単な比較をしてみよう。

國寶本（686）	天平本（740）
内 題：「金剛場陀羅尼經」	内 題：「金剛場陀羅尼經」
譯者號：「三藏法師□那崛多譯」	譯者號：「三藏法師闍那崛多譯」
譯者號下字：「備」	譯者號下字：「備」
尾 題：「金剛場陀羅尼經 <u>一卷</u> 」	尾 題：「金剛場陀羅尼經 <u>卷</u> 」
興聖寺本（12世紀後半）	七寺本（1175-1178）
内 題：「金剛場陀羅尼經」	内 題：「金剛場陀羅尼經」
譯者號：「三藏法師闍那崛多譯」	譯者號：「三藏法師闍那崛多譯」
譯者號下字：ナシ	譯者號下字：ナシ
尾 題：「金剛場陀羅尼經 <u>一卷</u> 」	尾 題：「金剛場陀羅尼經 <u>一卷</u> 」

尾題の末にある「卷」をとりまく状況は實に興味深い現象である。國寶本は「卷一」とあるが、これは卷二以下の卷數を豫定している書き方である。しかしながら『金剛場陀羅尼經』は一卷しかない。分卷するには分量が不足する。諸經錄を見ると奈良時代に影響のあった經錄は主に『開元錄』であるが、ここでは隋代から列挙してみよう。

隋代の經錄『歷代三寶紀』卷十二には「金剛場陀羅尼經一卷。開皇七年六月翻。八月訖。沙門僧琨等筆受。沙門彥琮制序」<sup>20</sup>とある。

唐代では『靜泰錄』卷二に「金剛場陀羅尼經十四紙 隋開皇年崛多譯」<sup>21</sup>とあり、靖邁撰『古今譯經圖紀』卷四には「金剛場陀羅尼經一卷」<sup>22</sup>となってい

20 『大正藏』49卷104頁上段5行

21 『大正藏』55卷192頁上段7行

22 『大正藏』55卷366頁上段16行

る。また『大唐内典録』卷六には「金剛場陀羅尼經十四紙」<sup>23</sup>と記され、『大周録』卷三には「金剛場陀羅尼經一卷十七紙／右隋開皇七年三藏闍那崛多及笈多於長安大興善寺譯。出長房録」<sup>24</sup>とされている。『開元録』卷十九では「金剛場陀羅尼經一卷一十四紙」<sup>25</sup>となっている。

以上整理すると經録には『金剛場陀羅尼經』の紙数は十四紙から十七紙であり、藤本氏の記した十九紙は記されていない。十四紙でもまた十七紙でも、またたとえ十九紙であったとしても本經は一卷以外に考えられないのである。それは通常經卷は平均して二十紙であるから、それ以下の紙数の經卷を調卷して二卷にすることはあり得ない。従って『金剛場陀羅尼經』は一卷であるとするのが正しい。

さらに日本古寫經本の實際の紙数と行数を整理すると以下ようになる。

國寶本	15 紙 369 行。
天平本	14 紙 369 行。
興聖寺本	13 紙 368 行。
七寺本	14 紙 370 行。

いずれにしても調卷して二卷仕立てにする分量ではない。「卷一」とは何を表わす表示であろうか。國寶本以外の日本古寫經を見ていくと何かが見えてくるに違いない。

五月一日經本には「卷」とだけある。これは實に異なることである。卷につづく數字を忘れたのであろうか。五月一日經本は敕定一切經の中心にある權威ある寫經本である。そのようなことは起こりえない。訂正するには別紙を用意して書寫するのが通常であるし、また他の五月一日經本に相當數散見する朱字での校正があれば「卷一」もしくは「一卷」と記したであろう。丸善雄松堂のDVD 画像からは不鮮明であるが、「金剛場陀羅尼經」と「卷」の間の右傍に小さく朱字で「一」と書かれている。五月一日經の朱字に關しては林寺正俊氏が法道寺藏の五月十一日經『雜阿含經』卷三十六を五月一日經本と比較してい

23 『大正藏』55卷292頁上段5行～6行

24 『大正藏』55卷389頁下段27行～28行

25 『大正藏』55卷686頁上段15行

日本古寫經『金剛場陀羅尼經』（國寶本・五月一日經本・七寺一切經本・興聖寺一切經本）について（落合）<sup>26</sup>。他の二點も比較對照して三本の五月一日經に見られる朱字はすべて五月十一日經であることを指摘した。從來不明であった朱字の典據解明に大きな手掛かりを得た研究成果であった。

その林寺見解を五月一日經『金剛場陀羅尼經』の尾題における朱字に適用すると五月十一日經は「金剛場陀羅尼經一卷」とあったことが推測できる。

さてそうすると恐らくは五月一日經は、國寶本もしくはその系譜本を底本として書寫したのであるが卷末尾題の箇所「卷一」は誤寫であるに違いないと氣づき「卷」で止めたと想定できる。その後五月十一日經と校勘した際に右傍に朱字で「一」と入れ、「一卷」と訂正したのであろう。後代の平安時代院政期ではそれらの訂正された寫本を底本として書寫事業が行われたと考えられるのである。七寺一切經本は「一卷」とある。これが正鵠を射た表示である。また興聖寺一切經本も七寺一切經本と同じく「一卷」と記されている。

#### 4) 内題下の一文字について

藤本孝一氏は國寶本『金剛場陀羅尼經』の書寫年次に關する新たな指摘を提示し、議論が深まることを願った。赤尾榮慶氏は書寫年次について從來の説に相違することは全くないと強調した。さらに筆者は從來誰も指摘してこなかった幾つかの問題点をあげたが、特に國寶本の尾題の卷數表示から五月一日經本より古いと想定できると考えた。

しかし、疑問點はまだ残っている。それは内題の下の譯者號下に見られる「備」の意味である。通常その位置にあるのは千字文であるが、時代的にその可能性は低い。そもそも千字文の中に「備」は存在しない。「備」に相似した文字「修」の誤寫としても意味をなさない。これは何を表わすのか。何故卷頭の譯者號下に書かれているのか、それをどう解釋するのか、およそ見當がつかないのである。「備」を「そなえる」と読み、副本とする説もあるかも知れないが後世にはその用例が見当たらない。

26 林寺正俊「本文テキストからみた法道寺所藏の天平寫經『雜阿含經』の特色」（『日本古寫經善本叢刊第10輯『法道寺藏天平寫經雜阿含經卷第三十六／岩屋寺藏思溪版高僧傳卷第一』93頁～102頁。國際佛教學大學院日本古寫經研究所。令和元年。）」

但し、大膽な推測が許されるならば以下のような假説を提示したいと考える。それは今年“いとくら”11號(2022.3)に「國寶『金剛場陀羅尼經』の三つの謎」と題して短文を草したが、二番目の謎解きとして「備」を所有者の署名とし、その人物を吉備眞備(695～775)としたものである。その文章を挙げてみる。

### 「備」の謎

次に、内題とその後に續く譯者號の下に「備」とある文字の意味である。これは千字文ではない。この時代に一切經に千字文は使用された例がない上に、そもそも「備」は千字文に入っていないのである。それではこの「備」の意味は何か。國寶本であるだけに興味が盡きない。この問題を考察する前に、大正藏本(底本高麗再雕本)、國寶本(六八六年)、五月一日經(七四〇年)、興聖寺一切經本(十二世紀後半)、七寺一切經本(十二世紀後半)の五本を比較してみた。この中で、「備」は國寶本と五月一日經の二本だけに見られる文字である。つまり兩本は同系統の寫本と推定される。もちろん綿密な校訂においてもそれは實證されるが、ここでは紙面の都合で省いている。この作業だけでは兩者の前後關係は確定できない。天平寫經本を底本として國寶本が書寫された可能性が残る。この「備」については從來殆ど考察されてこなかったが、極めて重要な意味が秘められているのではないかと考える。それはもしこの一文字が所有者を示す字と假定するならば自ずと右大臣吉備眞備の名が出てくるからである。その可能性を援護する例を二點挙げよう。

一點は宮内廳書陵部藏の新羅玄一撰『無量壽經述記』である。卷首缺であり、本文は奈良時代もしくは新羅の書寫と見られるが、後補の表紙に「吉備公」とある。何らかの記録があってそのように後代の人物が貼付したに違いない。當初筆者は、吉備眞備は何故佛典の寫本を所有していたのだろうか、という疑問を抱いていた。それが少し溶けてきたのが二點目である。それは近年報告された鴻臚寺丞李訓墓誌に記された「日本朝臣備書」である。吉備眞備留學中の唐代の受け入れ役所鴻臚寺の祕書長であった李訓の墓誌に、能書家(?)であった「日本國」の「朝臣」の「備」が書したという點である。撰文は褚思光であるが、外夷の倭國の役

日本古寫經『金剛場陀羅尼經』（國寶本・五月一日經本・七寺一切經本・興聖寺一切經本）について（落合）  
人にそのような重責を擔わせることはあり得ないという論調も見られる。しかし、  
もしこれが事實であったならば、吉備眞備は日本を代表する書家であり、かつ漢  
籍だけでなく廣く佛典佛書を蒐集した人物となるであろう。この問題點をさらに  
探求する必要性があると言えるのである。

（“いとくら” 11 號 4 頁。日本古寫經研究所 2022.3）

その後、日本古寫經をあれこれ探索したところ『一切法高王經』の五月一日  
經の卷首序下に「備」が書かれていた。奈良寫經の轉寫本とされる平安鎌倉寫  
經の中、鎌倉時代前期書寫と想定される金剛寺一切經にも卷首序下に「備」が  
存した。そこで二本を比較對照したところ金剛寺一切經本は五月一日經もしく  
は同系統の寫本を底本としたものであることが分かったのである。さらに平安  
時代の院政期に書寫された七寺一切經を閲すると「備」は書かれていないが、  
興味深いことに五月一日經に付された朱字に全て一致することも分かった。こ  
れは『一切法高王經』に關しては、天平寫經五月一日經の系譜に金剛寺一切經  
が位置するということであり、天平寫經五月十一日經の系譜に七寺一切經が認  
められるということになる。

國寶本の書寫を 686 年とすると吉備眞備（695～775）の年代と合わないの  
ではという指摘があるが、これは古い寫本を所持していたということであり、何  
ら問題にならない。

だが、國寶本の「備」は本文の字と同筆ではないかという有力な意見もあ  
る。もし熟覽調査によって本文と同筆と認められればここまでの推論はその根  
據を失うことになる。何故ならば吉備眞備の生年は 695 年であり、國寶本の書  
寫は 686 年であるから全くあり得ないことになる。寫本の微妙な問題點につ  
いて論じる場合は、通常ならば必ず原本の熟覽調査と稱される實證的調査を行  
ってから發表するのが原則である。そういう意味で内題下の一文字については筆  
者も確たる論據は見つからないが、敢えて述べるのは現在のところ他に可能性  
を見いだせないからである。國寶本一點だけに見られる現象であれば此處まで  
述べないが、内題下に「備」が見られるのは『金剛場陀羅尼經』の五月一日經  
本と『一切法高王經』の五月一日經本と金剛寺一切經本の都合四點である。

## 5) まとめにかえて

上述したように『金剛場陀羅尼經』は隋代に闍那崛多によって漢譯された經典であるが、本經が父母先祖眷屬のために供養として書寫された例は本經以外に存在しない。敦煌本にも日本にもまた朝鮮半島にもその例を見ない。内容的に願經とするには相當な困難を伴うものであるが、敢えて寫經の功德を強調したとしても果たして空觀の思想が説かれた經典を書寫する積極的な理由が他にもあるのではないかと疑う餘地が存する。

國寶本『金剛場陀羅尼經』は日本古代の代表的な古寫經の一つとして文化的價値を有するが、日本では佛教學からの研究は殆ど皆無である。チベット語譯も存するし、異譯（佛陀扇多譯『金剛上味陀羅尼經』と曇倩譯『金剛壇廣大清淨陀羅尼經』）もある經典であるから原典考證はもとより漢譯本の各種テキストを集成して校訂譯注する時期にいたったのではないかと考えるのである。因みに Candrakīrti の *Prasannapadā MādhyamikaVritti*（月稱造『中論釋』）には *Āryavajramaṇḍa-nāma-dhāraṇī-mahāyānasūtra* を引用しているという<sup>27</sup>。般若空觀的内容の經典を中觀派の巨匠チャンドラ・キールティが引用しているのも興味深い。

國寶本の願文には「歳は丙戌に次る年の五月、川内國志貴評の内の知識、七世父母及び一切衆生の爲に、敬みて金剛場陀羅尼經一部を造りたてまつる。此の善因に籍りて、淨土に往生し、終に正覺を成さむ。 教化僧寶林」<sup>28</sup>とあるが、インド中觀派の所依經典のような『金剛場陀羅尼經』が、七世父母及び一切衆生のためにと稱して何故日本で寫經されたのか、探る必要が十分あるのではないだろうか。その問題提起として本稿を記した。

27 山口益『月稱造中論釋』I。70頁～71頁（弘文堂書房。昭和22年）。註①にはこれを『金剛上味陀羅尼經』に比定し、E.Burneufの『インド佛敎史序論』の「この金剛上味陀羅尼は、タントラの系統が、最高の佛敎哲學思想と嚴密に合一した一つ新たな證據を提供するものである」を引用している。『金剛上味陀羅尼』は『金剛場陀羅尼經』の異譯であるから同じことであろう。

丹治昭義譯注『中論釋 明らかなことば I』p43（關西大學東西學術研究所。1988年）参照。

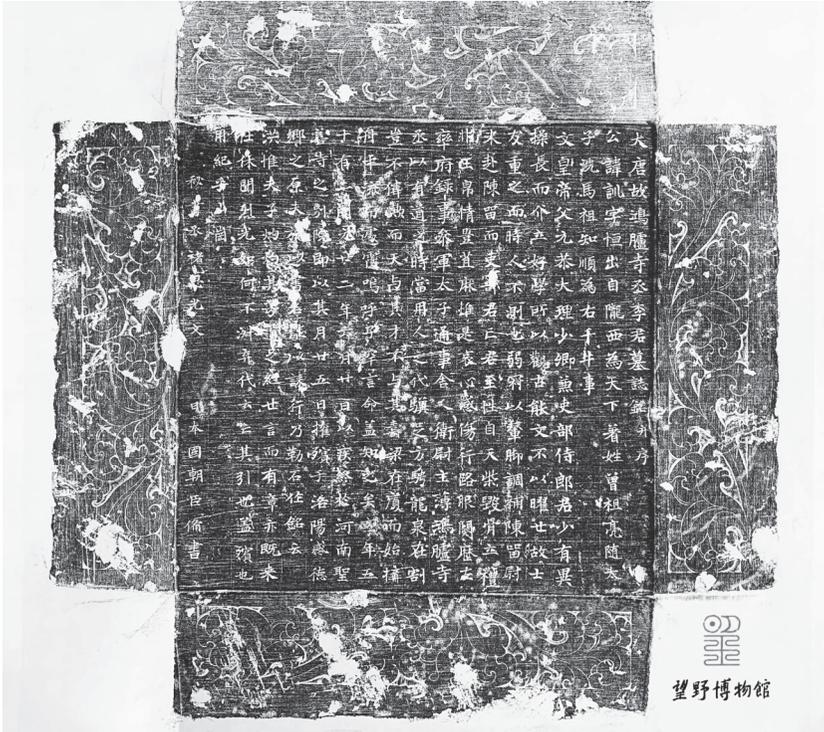
28 『上代寫經識語注釋』5頁（勉誠出版。2016年）の讀みに従った。

日本古寫經『金剛場陀羅尼經』（國寶本・五月一日經本・七寺一切經本・興聖寺一切經本）について（落合）

ただ、繰り返すが、當然のことながら國寶本や天平寫經の熟覽調査が先ずは必須である。そのことを實現するだけでも困難な道程となるであろうし、また併せて新たな視點に立った興聖寺一切經・七寺一切經・石山寺一切經・妙蓮寺藏松尾社一切經などの平安鎌倉寫經などの古寫經調査も求められる。これら一つ一つが實現することを期して稿を閉じたい。

（了）

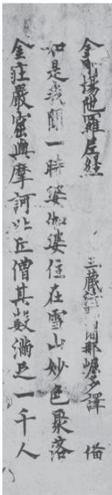
〈キーワード〉 金剛場陀羅尼經、國寶本、五月一日經本、七寺一切經本、興聖寺一切

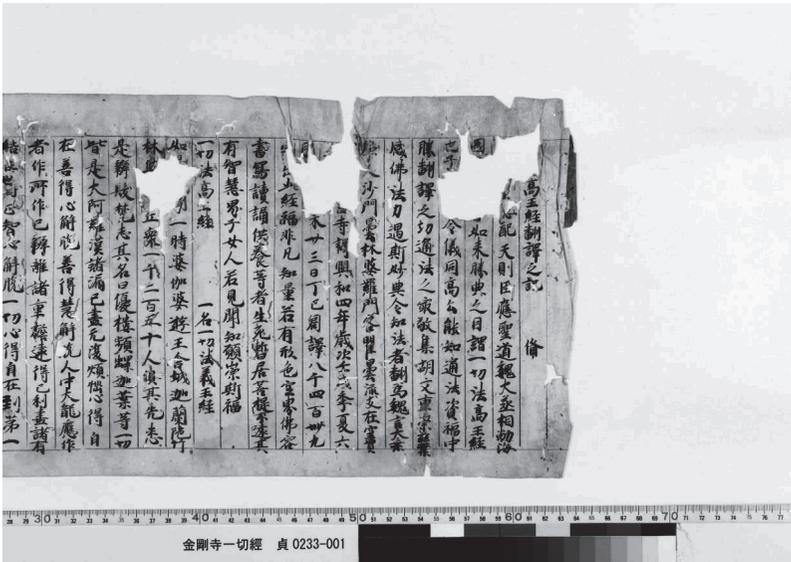


望野博物館

上：望野博物館藏「大唐故鴻臚寺丞李訓墓誌銘并序」  
(氣賀澤保規氏提供)

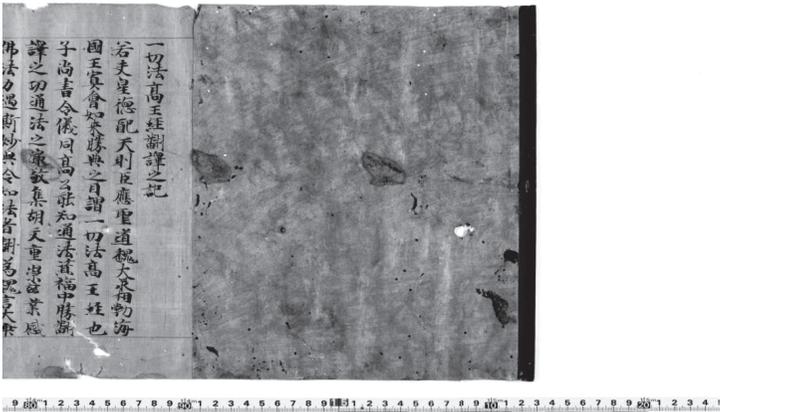
左：『金剛場陀羅尼經』卷首 (武田墨彩堂影印)





金剛寺一切經 真0233-001

金剛寺一切經『一切法高王經』卷首



七寺一切經 真0233-001

七寺一切經『一切法高王經』卷首